

談話論からみた松本方言の 判断終助詞と通知終助詞

沖裕子

本論の目的は、長野県松本方言を対象に、終助詞を、形態的、構文的、談話的な観点から、その特徴を体系的に明らかにすることにある。

松本方言において、終助詞文の文末イントネーションを上昇させたとき、〔質問〕の談話的意味が生じる文と、〔質問〕の談話的意味が生じず〔押付〕の談話的意味が生じる文があることを指摘し、前者の終助詞を判断終助詞、後者の終助詞を通知終助詞と呼び、分別する。他方、語基となる動詞等1語のみの終止文に文末上昇イントネーションをかぶせると、終止形終止文の談話的意味は〔質問〕となり、連用命令形と志向形終止文の談話的意味は〔押付〕となることから、これと並行的な現象が、終助詞終止文にもみられたことが指摘できる。

これらの観察より、終助詞はすべて、述語の語基となる動詞等の活用形がもつ文終止と同質のムードを文法的意味として有していること、また、終助詞が語として有する命題評価の文法的意味と協働して、文末ムードを多様に展開する働きを担っていることを主張する。

1. はじめに

本論の目的は、長野県松本方言を対象に、終助詞の機能を談話論の視点から再考し、体系的に明らかにすることにある。

ここでは、次のことについて述べていく。松本方言において、文末が終助詞で終わる文（以下、終助詞文）の文末イントネーションを上昇させたとき、〔質問〕の談話的意味が生じる文と、〔質問〕の談話的意味が生じない文があることを、指摘する。このことによって、松本方言終助詞は、構文的機能の点から、2種の体系を有していることを明らかにする。前者の終助詞を判断終助詞、後者の終助詞を通知終助詞と呼び、分別する。

2. 先行研究

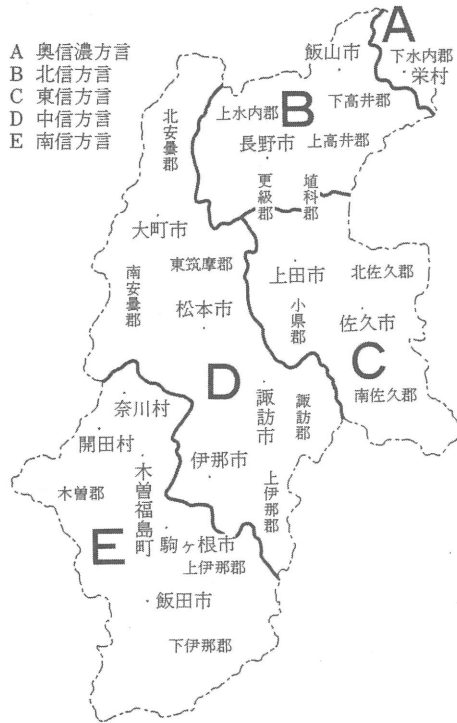
従来終助詞研究においては、特定の語詞をとりあげ、その意味分析を行う研究が蓄積されてきており、一定の成果をあげている。しかし、意味分析に際してイントネーションに着目する場合には、たとえば、「よ↑」と「よ↓」を別の形式として立てるといような扱いが多く、上昇と下降の音価は問題にされず、また、イントネーションの性質そのものへの配慮も不十分であったといえる。

他方、終助詞を体系的に扱った先行研究は数少なく、管見では、尾鷲市方言、稲沢方言等を対象とした丹羽一彌（2003）、長野県松本方言を対象とした沖裕子（2015）、共通語を対象とした佐治圭三（1957）などをみるにすぎない。また、いずれも、イントネーションとの関係をふまえた記述研究は行われていない。

本論では、論者の母方言である長野県松本方言を対象に、イントネーションと終助詞の関係を視野に入れながら、形態、構文、談話のレベルを分別しつつ考察を行う。こうした、形態、構文、談話のレベルを列あるいは層としてとらえ、それぞれの列あるいは層が時間的に同時に結節していくとする談

話観に立って分析を進めるものである（沖裕子 2006, 2010）。この談話観に立つことで、終助詞を含む文列と、それにかぶさるイントネーション列との関係がとらえやすくなる。ただし、術語が、現在、必ずしも一般的ではないことから、本論では、同時結節という記述モデルに立脚するが、用語としては積極的に用いずに述べていく。

資料としては、論者の内省（1955年生まれ、外住歴は20年、1955年～1973年松本市、1973年～1982年東京都区内、1982年～1993年関西圏、1993年～現在松本市）のほかに、馬瀬良雄（1992）の記述と、論者が行った調査資料を適宜参照した。



【図1】長野県の方言区画（馬瀬 1992 より）

馬瀬良雄（1992）によると、長野県は5つの方言区画に区分される【図1】。微細に観察すれば、世代や個人によっても終助詞の使用実態は異なるが、本

論における松本方言とは、おおむね、【図1】の中信方言(D)に松本市と記された場所を中心に松本平と呼ばれる地域で使用される広域方言を指す。馬瀬良雄(1992:399)では、中信地方の終助詞について、「(略)松本平・周辺地方の方言一般にそうであるが、終助詞(間投助詞を含む)が丁寧表現として非常に多く用いられ、この方言に色どりを添えている」と述べられている。

3. 対象とする松本方言終助詞

松本方言終助詞に分類される語詞には、どのようなものがあるか、まずみておきたい。形態論の枠組みで整理した先行研究に沖裕子(2015)がある。それを、引用修正して示すと【表1】になる(形態論は、概略、宮岡伯人(2002)にしたがっている)。

【表1】接続形式からみた主要な松本方言終助詞の分類(沖2015を修正)

前接形式 \ 後接形式		後接終助詞を必ずとる(終助詞化不完了*)	後接終助詞をとれる	後接終助詞をとらない
名詞にも、活用語終止連体形にも直接接続できる(過去形に接続する)	一部の終助詞に接続できる		ダ、カ△、サ、ズラ、ジャン、ジャー	セ、ドー
名詞に直接接続できないが、活用語終止連体形に直接接続できる(過去形に接続する)	一部の終助詞に接続できる	モン	イ△、ワ、ゾ、コト、デ、ニ、ガ	ジ、ンネ
名詞に直接接続できないが、活用語終止連体形に直接接続できる。(過去形、テ形、命令形++もしくは連用命令形+に接続する)	一部の終助詞に接続できる		ヨ(++), ッテ(++,+)	ネ(+), ナ(+), ヤ(++), ッテバ(++,+)

△志向形 V-zu にも接続する。* 使用者によって、モンで文を終結させる場合がある。

【表1】でも分かるように、松本方言では、「ダ、カ、サ、ズラ、ジャン、ジャー、セ、ドー」は、名詞にも、活用語の終止連体形にも後接する。特に、ダ¹が、活用語の終止連体形にも後接することは、共通語にある同形の倚辞「だ」とは異なっている。(なお、ダは活用するが、活用することをもって倚辞でないとはされない²。)

共通語では、「事物名詞・状態名詞+だ」や、推量の「だろう」は、判断のムードを担うとされる一方、「これは、花さ」という「名詞+さ」の用法があってもなお、「さ」は終助詞とされて、「だ」「だろう」とは一線を描く扱いが一般的である。名詞に後接して文を成立させるこれらの語詞は、同じ文法的範疇に属すとして統一的に考察することが妥当だと、論者は考えている。

なお、【表1】にあげた終助詞は、活用語の終止連体形および過去形には、ひとしなみに接続する。終止連体形は、文成立において名詞的ふるまいをすることからみても³、【表1】の語詞は、形態構文論的に同一の範疇に属していると考えている。

4. 終助詞とイントネーションに関する本論の立場

4.1 終助詞の定義と特徴

終助詞の位置づけについては、沖裕子(2015)に従う。部分を引用しつつ要約して示しておきたい。

- ① 終助詞とは、文の末尾に位置して文を完結させる働きをもつ倚辞の一群を指す。これらの倚辞は、相互に承接することが特徴である。たとえば、「行クサネ(行くよね)」では、動詞「行ク」に後接した「サ」「ネ」が終助詞であるが、それらは1文の中で重ねて用いることができ、使用に際して相互に排他的関係には立たない⁴。

- ② 終助詞は、構文的には「文の末尾に位置して文を完結させる働きをもつ」と定義できるが、これらの倚辞は、語義にも共通する点がある。それは、その文の命題に対する話し手の捉え方を示していることである。命題と終助詞との意味的關係のありかたは、文副詞の働きと類似している（宮岡伯人2002, 沖裕子2013）。文副詞は、「幸い, 事故に合わなかった。」「からくも, 逃げお寄せた。」などのように、文の命題内容全体を修飾している。日本語では修飾語は被修飾語の前に置かれるため、終助詞は文法的には修飾の働きはもたないことは言うまでもないが、命題と語詞の意味的關係に注目したときに、命題内容全体に対する話し手の見方（評価のしかた）を示しているという点で、文副詞の意味のありかたとの類似性が指摘されるのである。
- ③ 終助詞は、意味的には、命題に対する話し手の捉え方を示す語詞であり、かつ、文末に位置して文を完結させる働きがあることから、文成立にかかわるムード性を担う語詞でもある（7.2, 7.3 に詳述）。

4.2 イントネーションの定義と松本方言の特徴

松本方言談話におけるイントネーションの位置づけについては、沖裕子(2012)に従う。部分を引用しつつ要約して示せば、次のようなものである。

- ① アクセントは、語に付帯する所与の単位であって、話者が勝手に変更できない単位であるのに対し、イントネーションは話者の意図の表現のひとつであり、イントネーション文法に従って話者が表現を整備、産出し、また表現の意味や意図の解釈において参照される談話上の単位である。
- ② イントネーションは、アクセントを弱化させたり、除去したりすることから（Wells, J.C. 2006）、アクセントの上にかぶさる超分節的単位であるといえる。松本方言においては、アクセントもイントネーションも、ピッチの高下によって表現される⁵（以後、ピッチの高下

の記号は、[,] 等で表記する)。

③ 松本方言の句末イントネーションの聞こえについては、次のように観察される。

1. 句末の音調形式には、／上げ・平ら・下げ／の3種がある。
2. ／上げ・平ら・下げ／には、次の具体相 [A種, B種, 組合せ種] が認められる。

A種：句末拍と-2拍との高さの関係で、／上げ・平ら・下げ／が決定される形式

B種：句末母音の伸長による漸次的高さの方向性で、／上げ・平ら・下げ／が決定される形式

組合せ種：A種とB種, B種とB種の組合せによる形式

④ 句末音調の聞こえにおいては、アクセントの干渉がみられる場合がある。

- ・アクセントがそのままイントネーションとして顕現する場合の聞こえは／平ら／である。

例：平板アクセント〈小豆〉：コ [レ] ア [ズキ (イントネーションの聞こえは平ら)]

中高型アクセント〈眼鏡〉：コ [レ] メ [ガ] ネ (イントネーションの聞こえは平ら)

- ・句末音調の聞こえにおいては、その句の句立てのピッチが高いところより、さらに高いピッチを実現した場合に／上げ／と聞こえる。[[は、音調句内の句立てに利用される上がり目のピッチより、さらに高いピッチになるか、アクセントの上がり方の実相より大きく上がることを示して用いる。

例：用言複合体にかぶさる句末音調の聞こえ

二十歳だよ：／ハタチ＝ダ＝ヨ／ (以下のイントネーションは、例示)

／上げ／A種 [ハ] タチダ [[ヨ]

B種	[ハ] タチダヨ [[一
／平ら／A種	[ハ] タチダヨ, [ハ] タチダ [ヨ,
B種	[ハ] タチダヨー
／下げ／A種	[ハ] タチダ] ヨ
B種	[ハ] タチダヨ] ー

5. 文末上昇イントネーションが かぶさったときの述語文の意味

5.1 述語終止文の文法的モードと談話的意味

終助詞の考察に入るまえに、まず、終助詞をはじめとした用言複合体へと拡張する形式が接続していない、語基となる動詞等の述語1語で終わる文（これを本論では述語文あるいは述語終止文と仮に呼んでおく）を対象に、その活用形の文末モードを、当該文に文末上昇イントネーション（上げイントネーションをさす、以下同様）をかぶせたときの談話的意味との関係において整理しておきたい。

以下では、動詞述語終止文を例にとって説明したい。文末上昇イントネーションに共通する意味は〈発話内容を聞き手になげかける〉ことにあるが、観察してみると、述語活用語尾のモードによって、次のように、談話的意味が異なることが知られる。

5.2 述語文が終止形終止の場合

主語の人称にかかわらず、述語が終止形（拡張語尾、-a-rer-u, -a-ser-uなども含む）の場合は、活用形が有するモードは〈判断〉（〈叙述〉とも）となる。そして、〈判断〉のモードを文末上昇イントネーションによって聞き手になげかけると、(1) から (4) のように、当該の文の意味内容について、聞き手の意見を求める談話的意味、すなわち〔質問〕が生じると考えられる。以下に、用例（イントネーションは例示、以下同様）をあげる。

- (1) ア [シタ ア] メ [フ] ル [[一
 (明日, 雨, 降る?) [質問]
- (2) ア [シタ ク] ロダクンワ イ [[ク
 (明日, 黒田君は, 行く?) [質問]
- (3) オ [マエ] ア [シタ イ] [[ク
 (お前, 明日, 行く?) [質問]
- (4) ア [シタ] ワ [タシ イ] [[ク
 (明日, 私, (手伝いに,) 行く?) [質問]

5.3 述語文が連用命令形終止・志向形終止などの場合

終止形終止文に対して, 連用命令形終止文 (5) の場合は, その法 (ムード) は, 〈軽い命令〉となる。この場合, 文末上昇イントネーションがかぶさっても, [質問] の談話的意味は生じないことが, 本論であえて指摘したいことである。〈軽い命令〉という策動ムード (相手に働きかけるムード) に, 文末上昇イントネーションがかぶさると, その談話的意味は, 〈軽い命令〉を聞き手に申し渡すという [押付] になるのである。

- (5) オ [マエ] ア [シタ] イ [[キ
 (お前, 明日, 行きな) [押付]

また, 連用命令形終止文だけではなく, 次のように, 志向形終止文 (6) でも同様である。志向形終止文に文末上昇イントネーションがかぶさっても, 当該文の談話的意味は [質問] にはならない。話し手の意志を相手に申し渡す, [押付] の談話的意味になるのである。(談話において, 話し手の意志を聞き手に押付け, かつ, 聞き手が受諾・拒絶・受流しなどの反応を示したとき, それらの対話的談話のやりとりのなかで, 志向形終止文には [勧誘] という談話的意味が生じると考えられる。)

- (6) ア [シタ] イ [コ [一
 (明日, 行こう) [押付] *非質問

なお、「イケ（行け）」「オキロ（起きろ）」などの命令形終止文は、文末上昇イントネーションがとりにくい。文意が、相手に考慮する余地を与えないからであろう。表現的な理由から、あえて文末上昇イントネーションをかぶせることは可能ではあるが、その場合にも、〔質問〕の意味は生じない。「〔ハ〕ヤク イ [[ケ（早く，行け）]]」「〔ハ〕ヤク オ [キ] ロ [[ー（早く，起きろ）]]」など、〔押付〕か〔問い返し〕（〔問い返し〕については、森山卓郎（1989）参照）の意味になる。

6. 終助詞文のモードと談話的意味

6.1 終助詞文にかぶさる文末上昇イントネーションと談話的意味

それでは、終助詞を用いた文に文末上昇イントネーションがかぶさったとき、終助詞文の談話的意味は、どのように観察できるであろうか。

結論を先に示すと、次の、(ア) (イ) (ウ) の3種が認められる。

文末上昇イントネーションと談話的意味

- (ア) 文末上昇イントネーションがかぶさったときの談話的意味が、〔質問〕になる終助詞文（ダ、カ、ズラ、ジャン、ジャネー、イ、コト、ネ、ナ）
- (イ) 文末上昇イントネーションがかぶさったときの談話的意味が、〔質問〕にならず、〔押付〕になる終助詞文（サ、セ、モン、ゾ、ジ、ンネ、ニ、ヨ）
- (ウ) 文末上昇イントネーションをとりにくい終助詞文（ワ、ドー、ッテ、バ、デ）

6.2 文末上昇イントネーションにより〔質問〕の意味になる終助詞

以下に、用例をあげてみたい。これらの終助詞は、語義（命題に対する話し手の捉え方）が異なり、待遇の意味も含め、細かなニュアンスの違いや、

使用頻度の異なりがあるが、本題に関係しないため、() 内に、おおよその共通語訳を漢字平仮名混じり文で示すにとどめる。次の (7) から (15) は、文末上昇イントネーションがかぶさった場合に、当該文の談話的意味が〔質問〕になる終助詞文である。

- (7) ア [シタ] イ [ク] [ダ]
 (明日, 行くのか?)〔質問〕
- (8) ア [シタ] イ [ク] [カ]
 (明日, 行くか?)〔質問〕
- (9) ア [シタ] イ [ク] ズ [[ラ]
 (明日, 行くだろう?)〔質問〕
- (10) ア [シタ] イ [ク] [ジャン]
 (明日, 行くじゃん?)〔質問〕
- (11) ア [シタ] イ [ク] ジャ] ネ [[一
 (明日, 行くじゃない?)〔質問〕
- (12) ア [シタ] イ [ク] [イ]
 (明日, 行くでしょう?)〔質問〕
- (13) ア [シタ] イ [ク] コ [[ト
 (明日, 行くこと?)〔質問〕
- (14) ア [シタ] イ [ク] [ネ]
 (明日, 行くね?)〔質問〕
- (15) ア [シタ] イ [ク] [ナ]
 (明日, 行くな?)〔質問〕

6.3 文末上昇イントネーションにより〔質問〕の意味にならない終助詞文

上記に対して、次の (16) から (23) の例は、文末上昇イントネーションがかぶさった場合に、当該文の談話的意味が〔質問〕にはならない終助詞文である。これらの終助詞文は、話し手が命題の意味内容を、聞き手に申し渡す談話的意味〔押付〕となる。

- (16) ア [シタ] イ [ク] サ [[一
 (明日, 行くさ)〔押付〕
- (17) ア [シタ] イ [ク] セ [[一
 (明日, 行きますよ)〔丁寧な押付〕
- (18) ア [シタ] イ [ク] モン
 (明日, 行くもん)〔押付〕
- (19) ア [シタ] イ [ク] ゾ
 (明日, 行くぞ)〔押付〕
- (20) ア [シタ] イ [ク] ジ
 (明日, 行きますよ)〔丁寧な押付〕
- (21) ア [シタ] イ [ク] ン [[ネ
 (明日, 確かに行きますよ)〔丁寧な押付〕
- (22) ア [シタ] イ [ク] ニ
 (明日, 行きますよ)〔丁寧な押付〕
- (23) ア [シタ] イ [ク] ヨ
 (明日, 行くよ)〔押付〕

6.4 文末上昇イントネーションをとりにくい終助詞文

次の(24)から(30)は, そもそも, 文末上昇イントネーションをかぶせにくい終助詞文である。

- (24) ア [シタ] イ [ク] ワ [[一
 (「明日, 行くわ」だって?)〔問い返し〕
- (25) オ [レ] イ [ク] ド [[一
 (「俺, 行くんだわ」だって?)〔問い返し〕
- (26) ア [シタ] イ [ク] ツテ
 (明日, 必ず行く)

※文末上昇イントネーションをとりにくい。自己判断をかけない命題の時は文末上昇イントネーション〔質問〕が可能だが, 引用の格助詞で別語である。

(27) ア [シタ] イ [ク] ッテ バ

(明日, 必ず行くってば)

※文末上昇イントネーションをとりにくい。

(28) ア [シタ] イ [ク] デ

(明日, 行くから)

※文末上昇イントネーションをとりにくい。

(29) ア [シタ] イ [ク] ガ

(明日, 行くけれども)

※文末上昇イントネーションをとりにくい。

(30) ド [コ イク] [[ヤ

(どこに行くのかね)

※ヤが終止連体形に接続するのは、疑問詞を用いた文の場合のみである。そして、これに文末上昇イントネーションをかぶせると談話的意味が〔質問〕になるが、それは、疑問詞があることによる。

(24) (25) は、あえて文末上昇イントネーションをかぶせれば、談話的意味として、〔問い返し〕のみが生ずる（なお、〔問い返し〕は、すべての文で可能である（森山卓郎 1989）。したがって、文末上昇イントネーションをかぶせても〔問い返し〕の談話的意味しか生じないことは、〔質問〕や〔押付〕の意味が生じていないということである。これが重要な点であると考えられる）。このことは、(24) (25) のワ、ドーという終助詞の語の意義特徴が、〈自問的主張〉にあることが要因だと考えられる。〈自問的主張〉であれば、文末上昇イントネーションを用いて談話的に相手に命題内容を問うたり、押付けたりすること自体が生じないからである。

また、文末上昇イントネーションをかぶせにくい (26) (27) のッテ、テバの意義特徴は、命題に話し手の主張内容が立つ〈強い主張〉であるためだと考えられる。聞き手の反応を期待する文末上昇イントネーションを選択してかぶせると、文意と談話的意味に齟齬が生じるためであろう。(28) (29) の終助詞デ、ガは、接続助詞から転成した終助詞であり、終助詞化が完了す

る途上であるとも考えられる。(あえて、文末上昇イントネーションをかぶせると、〔問い返し〕の談話的意味しか生じない。なお、同じく接続助詞から転成したニは、文末上昇イントネーションをかぶせることができる)。(30)の終助詞ヤは、※に記したところの理由による。

6.5 通知終助詞と判断終助詞

文末上昇イントネーションがかぶさった場合に〔質問〕の談話的意味が生じる終助詞文の終助詞は、「ダ、カ、ズラ、ジャン、ジャー、イ、コト、ネ、ナ」であった。これらの談話的意味が〔質問〕となるのは、命題に対する何らかの〈話し手の判断〉を、終助詞が、語の文法的意味(ムード)として担っているからと考えられる。命題に対する〈話し手の判断〉という文末ムードを有する終助詞終止文に対して、聞き手がどう思うかを文末上昇イントネーションを選択して問うから、談話的意味が〔質問〕となると考えられる。そこで、これらを判断終助詞と名づけておく。

また、文末上昇イントネーションがかぶさった時に〔質問〕の談話的意味が生じず、〔押付〕の談話的意味が生じる終助詞文の終助詞は、「サ、セ、モン、ゾ、ジ、ンネ、ニ、ヨ」であった。これらは、命題に対する何らかの〈話し手の意図の通知〉を終助詞がムードとして担っていると考えられる。〈通知〉を文末上昇イントネーションによって相手になげかけても、〔質問〕の意味は生じない。そこで、これらを通知終助詞と名づけておく。

7. 文末ムード体系からみた判断終助詞と

通知終助詞の性格

——終助詞とは何か——

7.1 述語終止文のムード体系と終助詞終止文のムード体系の共通性

判断終助詞と通知終助詞の区別が、文法的には何を意味しているのか、考察してみたい。

文末上昇イントネーションがかぶさったときの当該文の談話的意味から、文末の文法的ムードを整理すると、文末に位置する終助詞群には、判断終助詞と通知終助詞の別があることをみた。さらに、この事実、次のように、終助詞終止文だけではなく、述語1語で終わる述語終止文に、並行的にみられる事実でもあることを、ここでは指摘したい。なお、文末上昇イントネーションをかぶせにくい命令形終止文、および、その他の終助詞については措いて示す。これらは、いずれにしても〔質問〕の意は生じず、〔押付〕もしくは〔問い返し〕となるからである。

文末上昇イントネーションがかぶさった場合

終止形終止文の場合

〔質問〕の談話的意味になる。

文法的ムードは〈判断〉。

連用命令形・志向形終止文の場合

〔押付〕の談話的意味になり、〔質問〕の談話的意味は生じない。

文法的ムードは、〈軽い命令〉〈意志〉。

文末上昇イントネーションがかぶさった場合

判断終助詞終止文の場合

〔質問〕の談話的意味になる。

文法的ムードは〈判断〉。

通知終助詞終止文の場合

〔押付〕の談話的意味になり、〔質問〕の意味は生じない。

文法的ムードは、〈意図の通知〉。

上記を、整理してみると、【表2】のようになる。

【表 2】 述語終止文と終助詞終止文の文法的モードと文末上昇イントネーションをかぶせたときの談話的意味

述語終止文		終助詞終止文	
文法的モード (活用形)	談話的意味 (イントネーション上 げの場合)	文法的モード (語)	談話的意味 (イントネーション上 げの場合)
〈判断〉 (終止形)	〔質問〕	〈判断〉 (ダ, カ, ブラ, ジ ヤン, ジャネー, イ, コト, ネ, ナ)	〔質問〕
〈軽い命令〉 (連用命令形)	〔押付〕	〈意図通知〉 (サ, セ, モン, ゴ, ジ, ソネ, ニ, ヨ)	〔押付〕
〈意志〉 (志向形)			

7.2 終助詞とは何か

終助詞には、次のふたつの働きがある、と先に述べた。

終助詞が語として有する文法的意味

- ① 命題内容全体に対する話し手の見方をあらわす (命題評価)
- ② 文成立にかかわるモード性を担う (文末モード)

これら①②は、ともに、すべての終助詞が、語であることから有している文法的意味であると本論は考えている。そのため、すべての終助詞は、文成立にかかわるモード性を文法的意味として有し、その語が文の末尾に位置したとき、その語がもつモードの性質によって、文全体のモードが決定すると考えるものである。

また、このことは、活用語が文末に位置した場合、文終止に関わる活用形によって、文全体のモードが決定されることと同様であることを指摘してきた。さらに、活用語の文終止のモードと、終助詞の文終止のモードは、体系的に相同の様相を示すことも、本論では、新たな事実として指摘するものである。

以上述べてきたように、終助詞とは、①命題内容全体に対する話し手の見方（評価のしかた）と、②文成立にかかわるムード性とを、語の文法的意味として備えた、倚辞群（語群）であると記述できる。

構文的にみれば、終助詞は、述語活用形語尾がもつ文終止のムード変異（-u がもつ〈判断〉や、-i がもつ〈軽い命令〉、-e が持つ〈命令〉、-oo が持つ〈意志〉など）を、倚辞が語的に分担して担っているものだと考えられる。そこで、終助詞とは、用言複合体の最末尾に位置して、文終止のムードを語的に備えることで、日本語の文末を多彩に展開する機能を果たしているといえる。

述語活用形の活用の数に比べ、松本方言の終助詞の数は多い（馬瀬良雄 1992: 399）。そのため、文末ムード②としては〈判断〉と〈通知〉を主として担いながら、その文法的意味①のありかたによって、結果的に文末を多彩に展開することになるのだと考えられる。

加えて、文が実際に発話されるときには、話し手の意図の表現のひとつである文末イントネーションが同時に選択される（＝同時結節する）。選択されたイントネーションが有する意味が、文字列の意味に加わることで、さらに、談話の意味も、多彩に展開されることになるのだと考えられるのである。

終助詞のこうした、語的、文法的、談話的特徴は、共通語を含めた日本語方言の基本的な言語的特徴としても記述できることと思う。

7.3 従来の終助詞観と本論の終助詞観の異同について

これまで終助詞は、その語がもつ意味的側面を中心に研究されてきており、その成果の蓄積は厚い。

一地域の方言終助詞を対象とした意味記述については、井上優の一連の富山県砺波方言を対象とした研究群があり（井上優 1995 など）、また、井上優（2002）では、方言終助詞の記述のための手引きの概略もまとめられている。また、渋谷勝巳による山形方言終助詞を対象とした一連の意味記述（渋谷勝巳 1995 など）も蓄積されつつある。共通語を対象とした「よ」「ね」については、多くの研究者が論を展開しており、大曾美恵子（1986）の問題提起に始まり、金水敏（1993）、蓮沼昭子（1995、1997）、伊豆原英子（2003）を始め

とした数多くの論考が発表されている。なお、共通語終助詞「ね」をめぐるには、宮崎和人（2002）に、要を得た研究小史がまとめられている。

これら終助詞各語の意味記述を重ねる論考とは別に、終助詞とは何かを文法的、体系的に問う論考が少ないことは本論冒頭でも触れたところである。

たとえば、佐治圭三（1957）では、共通語終助詞を対象として、「聞き手めあて」の終助辞（第1類）と、「判断めあて」の終助辞（第2類）を分類し、終助辞群をムードの点から2類に分けている。この考え方では、終助詞という語群は、「聞き手めあて」の意味を有した終助詞と、「判断めあて」の意味を有した終助詞とに分かれることになる。概略、「聞き手めあて」の意味とは、本論が述べる終助詞の文法的意味②にあたり、「判断めあて」の意味とは、本論が述べる終助詞の文法的意味①にあたる。本論の主張は、形態と意味の双方を重視して観察すると、文法的意味①②は、ともに、すべての終助詞が有していると考えるところにある。そこが、従来の終助詞観との相違である。

佐治圭三（1957）に示されたようなムード（あるいはモダリティー）の考え方は、その後の日本語文法論におけるモダリティーの階層性という考え方にも受け継がれていっている。たとえば、仁田義雄（1991）では、文を言表事態と言表態度からなっているとし、後者にモダリティーが含まれ、モダリティーを「言表事態めあてのモダリティー」と「発話・伝達のモダリティー」の2種に分けていく（なお、丹羽哲也（1992）は、その書評のなかで、こうしたモダリティーの分類に疑義を呈している）。また、益岡隆志（1991）では、命題の後部に、「取り立て—みとめ方／テンス—説明—価値判断／真偽判断—表現類型—いねいさ／伝達態度」というモダリティーが階層的に後続していき、終助詞「ね」「よ」は、「伝達態度のモダリティー」に関係する、というモダリティーを階層的にとらえる考え方を示している。

ちなみに、丹羽一彌（2003）は形態を重視する点では本論と立場に近いが、終助詞の排他的階層性を認めていることでは、モダリティーの階層構造を認める立場に寄っているともいえる。

くりかえしにはなるが、本論では、こうしたモダリティーの階層性という考え方をとらない。終助詞という語は、それが語であることから、すべての

語それ自体のなかに、文法的意味①②を含んでいると考える。その文法的意味のなかに文成立に関わるムード性②があり、文の最末尾にくる語のムードによってその文終止のムードが発現すると考えるものである。実際に、松本方言終助詞について、終助詞どうしの相互承接について観察してみても（沖裕子2015参照）、承接順序におおよその順序性はみられても、語ごとにグループを成して階層が認められるとはいいいにくい。

なお、終助詞が相互承接することについては、副詞や、副助詞などの、語が1文のなかで重ねて用いられることと同様の現象であると考えている（「もっと、はっきり、言って。」や、「東京までも、一人で行ける。」など）。

8. おわりに

長野県松本方言を対象に、以上述べてきたことをまとめて示したい。

文末上昇イントネーションがかぶさった場合、述語文では、活用形の有するムードによって、談話的意味が〔質問〕になる文と、〔質問〕にはならず〔押付〕になる文とに分かれる。

これと並行的に、終助詞文に文末上昇イントネーションがかぶさったとき、談話的意味が〔質問〕になる文と、〔質問〕にならず〔押付〕になる文とがみられる。このことから、終助詞が担っているムードによって、判断終助詞と、通知終助詞に、大別することができる。終助詞とは、①命題内容全体に対する話し手の見方（命題評価）、②文成立にかかわるムード性（文末ムード）を、文法的意味として備えた倚辞群であると記述できる。なお、終助詞が相互承接する場合は、最末尾の終助詞の性格によって文のムードが決定される。

形態論的な分類【表1】と、文法機能的な分類【表2】では、終助詞の分類結果が異なっていた。言語の恣意性を反映して、形と意味は、異なる原理で体系化されていたといえる。

- 注
- 1 松本方言では、「ア、財布が ナイ」とも、「財布が ナイダ」とも言う。前者の発見的状況では、ダは用いられない。聞き手に説明するような後者の状況で、ダが使用される。
 - 2 松本方言のダは、ダ、ダッタと活用する（ノ、ナ、ナラ、デは助詞で、ダの活用形とは考えない）が、倚辞であることに変わりはない（宮岡伯人 2002 参照）。【表 1】にあげた語詞は、ダ以外は、ズラも含めて活用しない。
 - 3 「オレ ヤル（私が、する）」などでは、-u が意志を表わすというよりは、テンスフリーで名詞的に表現した文（尾上圭介 1979）が、談話レベルにおける文脈の支えで、[話し手の意思] に解釈されたものと考ええる。
 - 4 丹羽一彌（2003）では、いわゆる終助詞を、終助詞、文末助詞、間投助詞に分けて、それぞれ別のパラディグムに属するとしているが、本論では、そうした考えには立たない。終助詞が相互承接するのは、語彙的な理由によると考える。副助詞のように、重ねて用いられる助詞と同様である。
 - 5 松本方言は、東京式アクセント。句音調も、東京方言と同様の音声文法を有する。

引用文献

- 伊豆原英子（2003）「終助詞「よ」「よね」「ね」再考」『愛知学院大学教養部紀要』51 卷（2）。
- 井上優（1995）「方言終助詞の意味分析—富山県砺波方言の「ヤ／マ」「チャ／ワ」—」『研究報告集』16, 国立国語研究所。
- 井上優（2002）「方言終助詞の記述研究のために」『日本語学』21-2, 東京：明治書院。
- 大曾美恵子（1986）「誤用分析 1 「今日はいいい天気ですね。」—「はい、そうです。」」『日本語学』5-9, 東京：明治書院。
- 沖裕子（2006）『日本語談話論』, 大阪：和泉書院。
- 沖裕子（2010）「依頼談話の結節法」『日本語学研究』28, ソウル：韓国日本語学会。
- 沖裕子（2012）「談話論からみた句末音調形式の抽出」『国立国語研究所論集』5。
- 沖裕子（2013）「終助詞を用いた推量表現—談話論による松本方言の分析—」『人文科学論集<文化コミュニケーション学科編>』47, 信州大学人文学部。
- 沖裕子（2015）「松本方言終助詞の文法体系—談話研究の基礎—」『信州大学人文科学論集』2, 信州大学人文学部。

- 尾上圭介 (1979) 「そこにすわる！」—表現の構造と文法』『月刊言語』8
—5, 東京: 大修館書店.
- 金水敏 (1993) 「終助詞ヨ・ネ」『月刊言語』22-4, 東京: 大修館書店.
- 佐治圭三 (1957) 「終助詞の機能」『国語国文』26-7, 京都: 臨川書店.
- 渋谷勝巳 (1995) 「山形市方言の文末詞ハ」『阪大社会言語学研究ノート』1,
大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』, 東京: ひつじ書房.
- 丹羽一彌 (2003) 「日本語「終助詞」の分類」『人文科学論集〈文化コミュニ
ケーション学科編〉』37, 信州大学人文学部.
- 丹羽哲也 (1992) 「書評 仁田義雄著『日本語のモダリティと人称』」『国語
学』171.
- 蓮沼昭子 (1995) 「終助詞「よ」の談話機能」『言語探究の領域 小泉保博
士古稀記念論文集』, 東京: 大学書林.
- 蓮沼昭子 (1997) 「終助詞「よ」の談話機能—その2—」『日本語教育論文
集—小出詞子先生退職記念—』, 東京: 凡人社.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』, 東京: くろしお出版.
- 馬瀬良雄 (1992) 『長野県史 方言編 全一卷』, 長野: 長野県史刊行会.
- 宮崎和人 (2002) 「終助辞「ネ」と「ナ」」『阪大日本語研究』14.
- 宮岡伯人 (2002) 『「語」とは何か—エスキモー語から日本語をみる』, 東
京: 三省堂.
- 森山卓郎 (1989) 「文の意味とイントネーション」『講座日本語と日本語教
育 第1巻』, 東京: 明治書院.

Wells, J.C. (2006) *English intonation: An introduction*. Cambridge:
Cambridge University Press.

付記

本論は、日本方言研究会第102回研究発表会（於学習院大学 2016年5月13日）における口頭発表「談話論からみた長野県松本方言の判断終助詞と通知終助詞」に加筆したものである。席上、有益なご指摘を賜ったことに感謝申し上げたい。

本研究は、JSPS 科研費 15K02561 の助成を受けた。記して謝意を表する。

（おき・ひろこ 信州大学教授）

On Declarative Final Particles and Imperative Final Particles in Matsumoto Dialect Analyzed by Speech Discourse Theory

Okii, Hiroko

The purpose of this paper is to consider the final particle in Matsumoto dialect from the viewpoint of morphology, syntax and discourse and to describe it systematically. The method employed in this research is based on synchronous discourse theory.

First, the author indicates that there are two types of predicate in the final position of the sentence with rising intonation: the conclusive form, which signals an interrogatory mood; and an adverbial functioning as an imperative form, which signals not an interrogatory but an imperative mood.

Second, the author describes the two types of final particle found in Matsumoto dialect: i) Declarative final particles, with a rising intonation at the end of the sentence, which signal an interrogatory mood at the discourse level; and ii) Imperative final particles, also with a rising intonation at the end of the sentence, which signal not an interrogatory but an imperative mood at the discourse level.

From the above, it follows that the mood system of final particles is similar or parallel to the mood system of predicate words such as verbs which occur in the final position of a sentence. Previous studies did not focus on the final particle mood system in this way, but on the fact that final particles have two types of mood in their syntagmatic meanings.